

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：23903

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12800

研究課題名(和文)「聞き書き」による着地型ツーリズムの可能性 愛知県高浜市の活動実践を中心に

研究課題名(英文) Stimulating Community-Based Tourism by "KIKIGAKI(Writing down what one hears)":
A Case Study in Takahama City, Aichi

研究代表者

佐野 直子 (SANO, Naoko)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号：30326160

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：地域の記録を残す「聞き書き」の実践自体が「地域おこし」や、周辺住民による「域内観光」喚起につながる様相について、愛知県高浜市において「聞き書き」を2015年度と2017年度の2回にわたって住民との協働で実践することで、調査・検証した。その過程で、市民や国内外の研究者や「聞き書き」実践者との交流・セミナー・報告会を、高浜市や名古屋市立大学などで3年間で10数回実施した。

上記をもとに、国内外の「聞き書き」事例を紹介しつつ、「地域づくり」につながる「聞き書き」の実践についてまとめた冊子『「聞き書き」で地域をつくる-聞く人がいて、話す人がいる-』を電子書籍として刊行した。

研究成果の概要(英文)： Regarding the aspect that the practice of "KIKIGAKI (writing down what one hears)", whose principal objective is to record regional memories, may stimulate "community building" and "community-based tourism", we conducted researches and verification by practicing "KIKIGAKI" twice in 2015 and 2017, with citizens in Takahama City, Aichi prefecture. In the process, we held exchanges, seminars and meetings with citizens, domestic and overseas researchers and practitioners of "KIKIGAKI", at Takahama city and at Nagoya City University, for dozen times in 3 years.

Based on the above, we published a booklet summarizing the practice of "KIKIGAKI" leading to "community development" with some examples of domestic and overseas "KIKIGAKI", "Creating a Community with KIKIGAKI - There are Someone to listen, and Someone to talk-" as an electronic book.

研究分野：地域言語・文化研究

キーワード：聞き書き 地域づくり オーラルヒストリー 域内観光

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「聞き書き」による地域の口述記録が、単にアーカイブとしての学術的価値や教育効果を持つにとどまらず、その実践現場において、住民間の交流やそれに伴う意識変化といった「地域おこし」や、地域の文化資源の再発見や再評価、そして域内観光の喚起につながる効果があることに着目した。

研究代表者・研究分担者は、それぞれインタビュー調査や「聞き書き」を研究・教育活動の中で実践してきた。その過程で、2014年12月に名古屋市立大学でシンポジウム「『聞き書き』を用いた地域づくりの可能性」を主催し、地域社会の中で「聞き書き」活動を実践してきた方々の多くの実践について議論したことが、上記の気づきを得た直接のきっかけとなった。

また、愛知県高浜市とは、2014年4月に高浜市役所との連携可能性を打診されており、9月に市民を対象にした「聞き書き」についての講演を実施していた。2015年度からの高浜市における「聞き書き」実践が模索されていたことから、主要なフィールド地として設定することができた。

2. 研究の目的

本研究は、国内外の実践事例を参考にしつつ、特に愛知県高浜市における取り組みに焦点をあてる。その実践過程において、(1)住民参加型の「聞き書き」手法を確立すると同時に、(2)「聞き書き」を通じた「地域おこし」の組織構築、人材育成のモデルを提示し、地域の人びともわかりやすく入手しやすい形の冊子を刊行・頒布すること、さらに(3)「聞き書き」実践をベースにした着地型ツーリズムの可能性を地区内観光、域内観光にターゲットを絞った形で提言することを目的として設定した。

3. 研究の方法

本研究においては、調査者自身が高浜市において「聞き書き」実践に深くコミットし、単なる参与観察にとどまらない市民との議論を通じた調査を実施する方法を採用した。

また、高浜市の事例を相対的にとらえるために、ほかの実践事例についての分析を組み込んで実施した。その際には、現地調査(フランス・沖縄・奥会津・琵琶湖地域)の実施のみならず、各地の取り組みについて実践者を招聘しての報告会を実施し、それらの成果を冊子の形でまとめて広く発信しようという試みであった。

4. 研究成果

(1) 高浜市での実践・調査

2015年度は、主要な調査地である高浜市において、高浜市役所文化スポーツグループのプロジェクト「タカハマ!まるごと宝箱」の一企画として、高浜市の主要産業である瓦産業についての「聞き書き」が実施された。

佐野がその企画立案に関わった。市民12名を対象とした「聞き書き」の実践とその冊子を刊行するというプロジェクトである。本研究では、このプロジェクトを遂行する過程を市民に開示し、「聞き書き」という実践による地域の文化・歴史・観光資源を見いだして関心を深め、市民自身の議論を喚起することをめざした。

6月4日には、聞き手となった名古屋市立大学学生高浜市民有志との交流会・勉強会を実施した。11月7日には、高浜市やきもの里かわら美術館にて、「聞き書き+かわらフォーラム」を開催した。そして、2016年3月19日には、「聞き書き」の成果物『100年先の子どもたちへの贈り物 聞き書き「たかはまとかかわら」』の冊子のお披露目会を開催した。「聞き書き」の実践への関心が高まり、次のプロジェクトをより市民参加型の形で企画しようという機運を高めることができたといえる。

2017年度から、高浜市は約40年ぶりとなる市誌編纂事業が立ち上がった。同事業は「市民が参加する市誌づくり」をめざしている点で、全国自治体でも類を見ない試みである。そして、その市民参加の一形態として、「聞き書き」の手法を組み込むことになったことから本研究と関連が深く、研究代表者の佐野は、同市の依頼を受けて市誌編纂事業に参画し、生活誌部会長として「聞き書き」プロジェクトを企画・実施した。年度末には「聞き書き」の成果は市誌資料として『新編高浜市誌『高浜のあゆみ』資料1「聞き書き 吉浜の養鶏・高取のくらし」』、市誌本体より一足先に刊行された。

この実践を通して、住民参加型の「聞き書き」手法の開発や、単に冊子を作成して終わるのではない、市民参加型の「聞き書き」実践のモデル事業として、一定の方向性を見いだすことができた。

まず、市民には語り手になってもらうのみならず、聞き手としても参画することになった。その際、聞き手は長年地域の活性化に携わり、市民に顔も広い地域の中心人物と、「よそ者・若者」としての大学生という組み合わせにすることで、それぞれのもつ強みと弱みをカバーする手法をとった。語り手への「聞き書き」自体は一回のみだが、聞き手グループの打ち合わせを複数回にわたって行うことで「聞き書き」に必要な知識を増やすのみならず、「聞き手」に「聞き書き」の面白さを事前に認識させることができた。

2017年6月3日には、高浜市のかかわら美術館で、聞き手となる高浜市民などを対象に、一橋大学の赤嶺淳教授を講師として「聞き書き」についての講演を行った。7月9日には、今回の聞き書きテーマである高浜市吉浜地区の養鶏を実際に訪問、また「聞き手」グループによる打ち合わせを実施した。9月23日には「タカハマ!まるごと宝箱」として、

語り手になっていただき高浜市吉浜地区の養鶏業者の座談会を開催し、当時の養鶏の様子などについて、市民と語り合う機会を設けた。さらに3月24日には、冊子刊行報告会としてかわら美術館での発表会を行い、聞き書きの実践をもとに、三河地震当時や戦後の高浜市の暮らしについて、市民の方々がさらにさまざまな思い出話を語った。

これらの実践から得られた知見は、まず「聞き書き」とは、語り手と聞き手が会うのみならず、聞き手同士の出会いであり、その事前・事後の議論や会合が「地域活性化」の直接の契機となることである。「聞き書き」は、もちろん何らかの成果物を出すことを目標とするが、その過程で、市民個人が収集していた写真や記録、自費出版の書籍などが集まり、当時のくらしにくわしそうな「語り手」候補も「発掘」されることになった。また、高浜市で十分に整理されていないまま保存されていたさまざまな生活用具などの整理・点検も行われるようになった。それらの情報が共有され、行政自治体にも把握されるようになることで、さらに関心が喚起される連関ができてくることが予想される。

今後も、この「聞き書き」プロジェクトは継続する予定となっている。

(2) 国内外での事例調査

国内外の比較事例としては、特にフランスにおける事例を中心に調査を行った。2015年度は、フランス・ドルドーニュ川流域において、フランスの人類学者アルメル・フォール氏との研究交流を行った。ドルドーニュ川流域では、1930年代から50年代にかけて発電ダムが数多く建設された。フォール氏は、これらの開発に伴う地域住民の立ち退きや生活の変化について聞き書きする「100人の証人」プロジェクトを企画・実践している。2015年8月には、佐野がフォール氏とともにドルドーニュ川流域を視察し、インタビューへの追加聞き取り調査に同伴した。フォール氏のプロジェクトでは、聞き取りインタビューをデータ化してそれを一部公開するのみならず、周辺資料(写真、当時配布されていたビラや雑誌など)のデジタル化も所有者の許可を得て行っており、系統的な資料収集と保存の手法が確立されていることが確認された。また、その成果をどのように活用していくかについての各自治体の議論や、「100人の証人」プロジェクトから派生する多様なプロジェクト(大きな住民移転のあったフランス国内の二つの地方のダムからダムへの行進など)も企画・実践されており、それらの企画を自治体で支援しようとする意識が醸成されていることも確認できた。

また、2016年度には、佐野はフランス・ベジエ市におけるNPO団体による教育活動についての聞き取り調査を実施した。すでに40年近くにわたる活動の中で徐々に教員養成システムを構築してきた団体の活動の推

移を、オーラル・ヒストリーとしてまとめることの重要性について、当該団体と議論を行い、特に現在の教育実習生を対象とした「聞き書き」を行い、その成果を2017年度に発表した(佐野2017a, 佐野学会発表2017)。

国内の事例においては、「域内観光」の資源としての沖縄のこぼの商品化の促進について、池原さんにインタビューを行った(佐野2017c)。また、2016年12月3日に行った多言語社会研究会第9回大会において「こぼの商品化」をテーマとしたシンポジウムを開催し、そこで議論をもとに論文を執筆した(佐野2017b)。また、長く小中学生による「聞き書き」を実践している奥会津地方、「聞き書き」の映像を記録・展示している県立琵琶湖博物館を中心とした琵琶湖周辺地域などを視察し、担当者との議論を行った。

(3) 研究交流・成果発表

本研究は、単に研究者が地域で調査を実施して、その成果を学会に発表するのではなく、地域住民や国内外の「聞き書き」実践者との議論、成果報告、共同実践などを通して、地域の活性化の方法を模索しつつ、それらの議論自体を地域の活性化・域内観光の活性化につなげることを目的としている。そのため、研究期間中は、実践例の報告、成果発表などの共有のために、セミナー・フォーラム・報告会などを数多く実施した。

2015年10-11月にかけては、フランスのドルドーニュ川流域の「聞き書き」プロジェクトを実践したフォール氏を日本に招聘した(名古屋市立大学客員研究員招聘制度)。フォール氏は、2015年10月30-31日に東北大学で開催された5th International Symposium on Environmental Sociologyにおける学会発表(浜本学会発表2015)、東北地方の被災地や女川原発への視察、奥会津地方における「聞き書き」実践の視察を佐野・浜本とともに行った。そして、2015年11月7日には、「聞き書き+かわらフォーラム」にて、フランスの実践例を紹介する特別講演を行い、高浜市民との活発な議論を行った。

これらの議論の中で改めて明らかになったことは、「オーラル・アーカイブ」「聞き書き成果の活用」についての国内外の蓄積の差である。日本では、個々の研究者の質的研究の蓄積はあるものの、地域の文化遺産・歴史遺産であると同時に、観光資源ともなりうるものが十分に認識されているとはいえない状況である。高浜市でも1980年代に、婦人会による「聞き書き」実践があり、その成果が冊子として刊行されているが、その記録テープや写真資料などは散逸していることが判明した。

一方フランスでは、オーラル・アーカイブの保存・活用実践が非常に進んでおり、フォール氏のプロジェクトは、フランス電力会

社 EDF の支援のみならず、県立公文書館のサポートによって進められている。北フランスでは、かつての炭坑業や繊維業などについての国立産業遺産アーカイブセンターなども設立されている。そして、「100 人の証人」プロジェクトの成果は、書籍として刊行し（佐野 2016）、その読書会などが各自治体で行われているのみならず、ダムに隣接する EDF センターなどで一部を視聴可能にするなど、域内観光の喚起に利用されている。日本にも活用できる知見として重要な研究交流を行うことができた。

2016 年度と 2017 年度は、国内の地域活性化の実践者の方々を招聘してのセミナーの開催や、座談会を実施した。特に 2016 年 12 月 10 日には、「地域のこぼと地域活性化」についてのセミナーを開催し、名古屋ことばの商品化・観光化の可能性と困難については、鈴木隆三氏、沖縄におけることばの商品化の事例について、池原稔氏を招聘して、活発な議論を行った。

2017 年 12 月 9 日には、観光客としてのみならず、「聞き書き」の聞き手としても注目される「よそ者」のあり方についてのセミナーを開催し、青年海外協力隊や名古屋のまちづくり団体を歴任したフリーランス・ファシリテーターの稲葉久之氏、青年海外協力隊後に地域おこし協力隊員として長野県に移住した中村雄弥氏を招聘した。

以上の調査・交流から得られた知見をもとに、最終年度である 2017 年度には、「地域おこし」の担い手育成などの効果に注目して、その手法を国内外の事例とともに提示するための冊子作成に着手した。2018 年 1 月 31 日には、佐野・浜本が編集した冊子の内容について、各地の「聞き書き」の実践者がそれぞれの経験をもとに吟味・議論するための座談会を実施した。この座談会では、教育・研究機関としての大学の実施する「聞き書き」のみならず、地方自治体、地域の民間団体などの多様な主体による活動の効果や利点・難点、その成果物の発信方法や、成果物の利用方法、それらのデータの保管の問題などについての議論がなされた。

座談会参加者からの意見を取り入れて本文を改定し、その実践事例は他の国内外の事例とともに掲載し、全 60 ページの冊子『「聞き書き」で地域をつくる～聞く人がいて、話す人がいる～』を 2018 年 3 月に刊行した。

広く市民に成果を共有していただくため、小部の紙媒体での冊子以外は、電子書籍版、pdf 版として、名古屋市立大学大学院人間文化研究科「地域づくり」ユニットの HP にて閲覧・ダウンロード可能な形で公開した（<https://www.region-ncuhum.com/project>）。電子媒体版は公開 1 か月で約 1200 ビューを集めるなど、「地域おこし」における「聞き書き」の効用について、社会的な関心を喚起

することができたのではないかとと思われる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 4 件)

佐野直子, 2016, 【書評】 *Bort-les-Orgues, Les mots sous le lac, récits et témoignages d'avant le barrage*, Armelle FAURE, Édition Privat, 2012 (アルメル・フォル, 2012 『ポール・レ・ゾルグ、湖面の下のことは、「ダム以前」の物語と証言』), 『人間文化研究所年報』11 号, 58-60

佐野直子, 2017a, 「十全な<言語>から欲望の言語へ — NPO 団体カランドレートによるオクシタン語教育運動の挑戦」, 『名古屋市立大学人間文化研究科人間文化研究紀要』27 号, 91-117

佐野直子(編), 2017b, 「池原稔さんに聞く『商品としてのしまくとぅば』」, 『ことばと社会』19 号、(三元社) 128-153

佐野直子, 2017c, 「『ことば』の商品化についての覚え書き」, 『ことばと社会』(三元社)19 号、(三元社) 4-25

〔学会発表〕(計 2 件)

HAMAMOTO, Atsushi, «The Memory and a Mid- to Long-term Evaluation of a Development Project: An Analysis based on Survey Data Collected 50 Years after the Construction of the Miboro Dam»

学会名: 5th International Symposium on Environmental Sociology in East Asia (国際学会)

発表年月日: 2015 年 10 月 31 日

発表場所: 東北大学

SANO, Naoko, "Qual son los locutors complets? -entrevistas als futur regents de la Calandreta ",

学会名: XIIe Congrès International de l'Association Internationale d'Etudes Occitanes (国際学会)

発表年月日: 2017 年 7 月 13 日

発表場所: Université d'Albi (フランス・アルビ)

〔図書〕(計 2 件)

高浜市, 2016, 『100 年先の子どもたちへの贈り物 聞き書き「たかほまとかわら」』(全 60 頁)(「聞き書き」実践企画・監修担当: 佐野直子)

高浜市, 2018 『新編 高浜市誌 『高浜のあゆみ』資料 1 「聞き書き 吉浜の養鶏・高取のくらし」』(全 82 頁)(「聞き書き」実

践企画・監修担当：佐野直子)

〔国際研究集会〕

「聞き書き+かわらフォーラム」

開催年月日 2015年11月7日

開催場所 愛知県高浜市やきものの里 かわら美術館

佐野直子「なぜ、今『聞き書き』なのか」

アルメル・フォール氏「地域における『聞き書き』実践の秘訣：フランスの事例から（フランス語講演、通訳：佐野直子）

〔その他〕

佐野直子・浜本篤史(編)『「聞き書き」で地域をつくる～聞く人がいて、話す人がいる～』（全60頁）

https://romancer.voyager.co.jp/ext/wp_read.php?post=71593&cid=1_71593_01032018173943&mode=v&a=fln2ke29

https://docs.wixstatic.com/ugd/975da7_45490bb7d44d495ebdbd86e9642b6b80.pdf

（「聞き書き」を利用した地域活性化について、その手法と事例をまとめた電子書籍型冊子）

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐野 直子 (SANO, Naoko)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号:30326160

(2)研究分担者

浜本篤史 (HAMAMOTO, Atsushi)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授

研究者番号：80457928